

## 口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台  
地域火山監視・警報センター  
鹿児島地方气象台

＜噴火警戒レベル4（避難準備）が継続＞

16日から17日にかけて実施した山麓からの観測、及び17日に九州地方整備局の協力により実施した上空からの観測では、新岳火口周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。

口永良部島では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量<sup>1)</sup>が多い状態で継続しており、15日に増加した火山性地震の震源は、2015年5月の噴火前（2015年1月）に発生した地震と概ね同じ場所であると推定されることから、今後、火山活動が更に高まる可能性があります。

### 【防災上の警戒事項等】

新岳火口から概ね3kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石<sup>2)</sup>及び火砕流<sup>3)</sup>に嚴重な警戒（避難準備等の対応）をしてください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石<sup>2)</sup>が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等が行う立入規制等にも留意してください。

## ○ 活動概況

### ・噴煙など表面現象の状況（図1～3、図4-①）

17日に九州地方整備局の協力により実施した上空からの観測では、2017年12月14日に実施した観測と比べて、新岳火口周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。新岳火口内の状況は噴煙のため不明でした。また、赤外熱映像装置<sup>4)</sup>による観測では、新岳火口西側割れ目付近に、地上からの観測で確認されている熱異常域が認められました。観測中は、火山ガスによる臭気が認められました。

16日から17日にかけて実施した山麓からの観測では、新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の噴気の状況、熱異常域の温度と分布に特段の変化は認められませんでした。また、新岳火口から青白色の火山ガスの噴出を確認しました。

### ・火山ガスの状況（図4-②）

17日に東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり1,200トン（前回13日：1,000トン）と、引き続き多い状態で経過しています。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ ([https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)) でも閲覧することができます。

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ(標高)』『基盤地図情報』『基盤地図情報(数値標高モデル)』を使用しています(承認番号：平29情使、第798号)。

・地震や微動の発生状況（図4-③、図5）

新岳火口付近のごく浅い場所を震源とする火山性地震は、8日及び10日に一時的に増加しましたが、11日以降は減少しています。

15日には、新岳西側山麓のやや深い場所を震源とする火山性地震が増加しましたが、16日以降は観測されていません。この火山性地震の震源は2015年5月の噴火前（2015年1月）に発生した地震と概ね同じ場所であると推定されます。

・地殻変動の状況（図6～7）

GNSS<sup>5)</sup> 連続観測では、口永良部島島内の基線で顕著な変化は認められていません。

- 1) 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた二酸化硫黄、硫化水素や水蒸気など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマの蓄積の増加や浅部への上昇等でその放出量が増加します。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用しています。
- 2) 噴石については、その大きさによる風の影響の程度の違いによって到達範囲が大きく異なります。本文中「大きな噴石」とは「風の影響を受けず弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とはそれより小さく「風に流されて降る小さな噴石」のことです。
- 3) 火砕流とは、火山灰や岩塊、火山ガスや空気が一体となって急速に山体を流下する現象です。火砕流の速度は時速数十kmから時速百km以上、温度は数百℃にも達することがあります。
- 4) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を検知して温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。
- 5) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

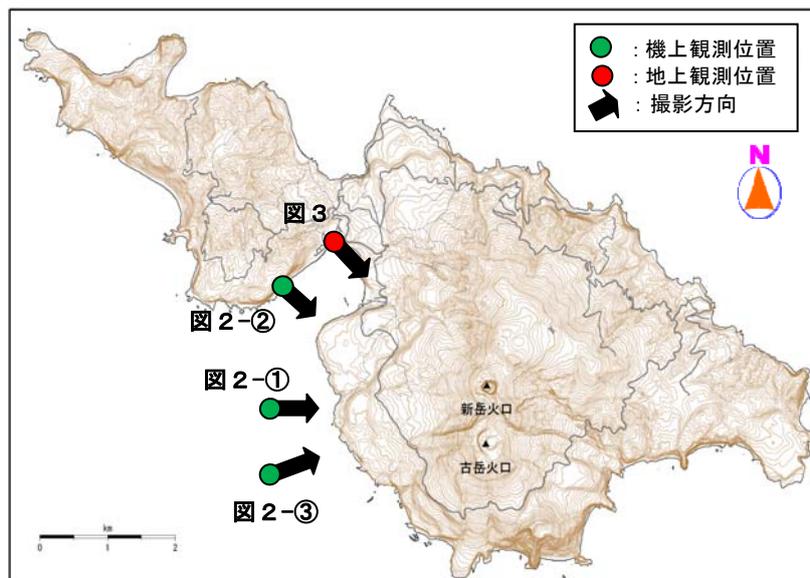


図1 口永良部島 観測位置及び撮影方向

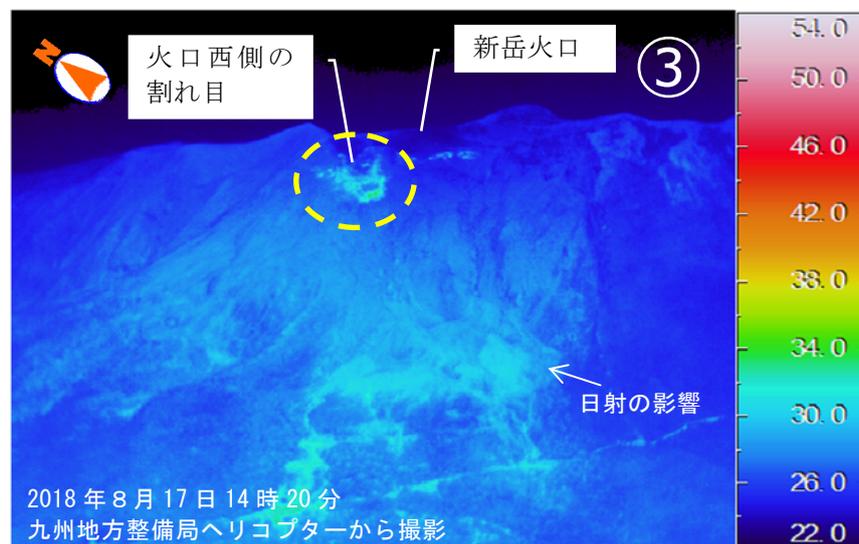


図2 口永良部島 新岳火口及び西側斜面の状況

- ・前回（2017年12月14日）に実施した観測と比べて、新岳火口周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。
- ・赤外熱映像装置による観測では、新岳火口西側割れ目付近に、地上からの観測で確認されている熱異常域（黄破線）が認められました。
- ・観測中は、火山ガスによる臭気が認められました。

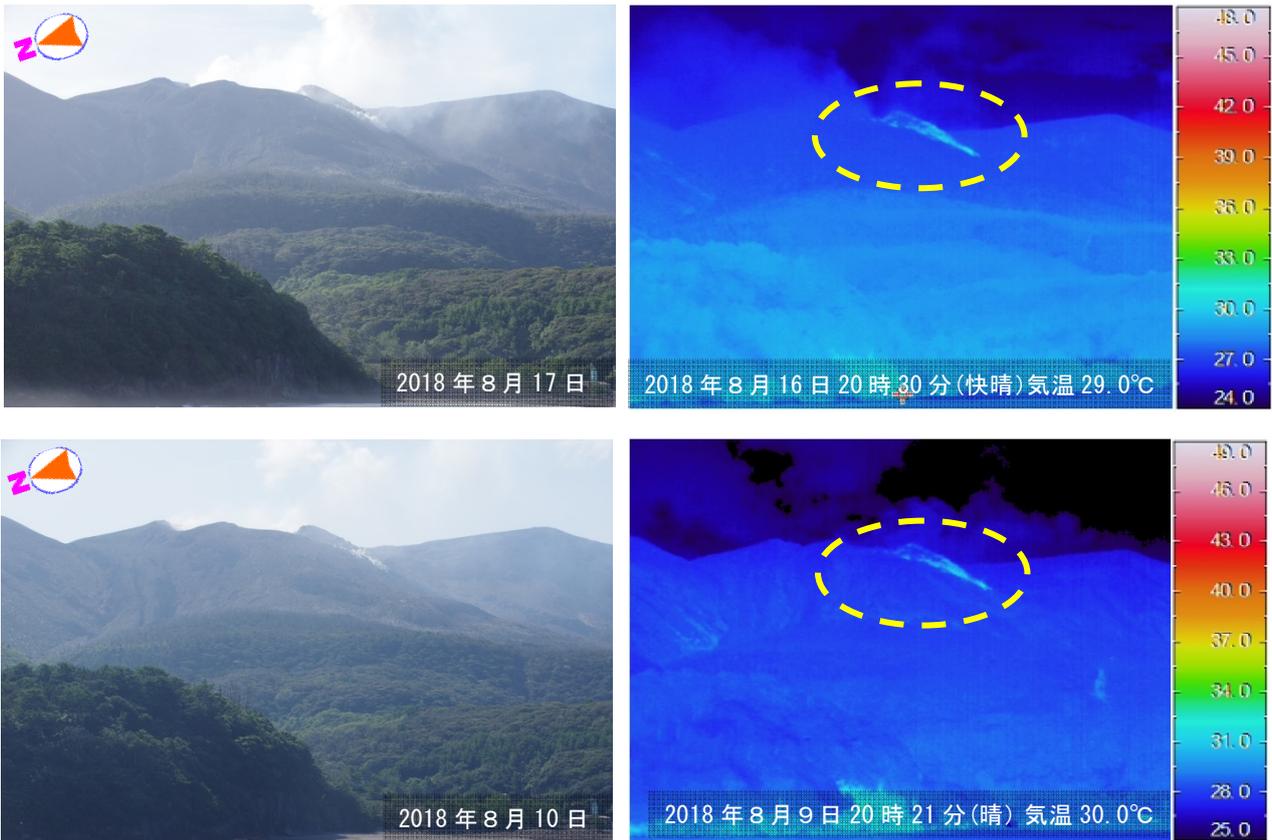


図3-1 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の可視画像と地表面温度分布  
前回（8月9日）と比較して、噴気及び熱異常域（黄破線）に特段の変化は認められませんでした。

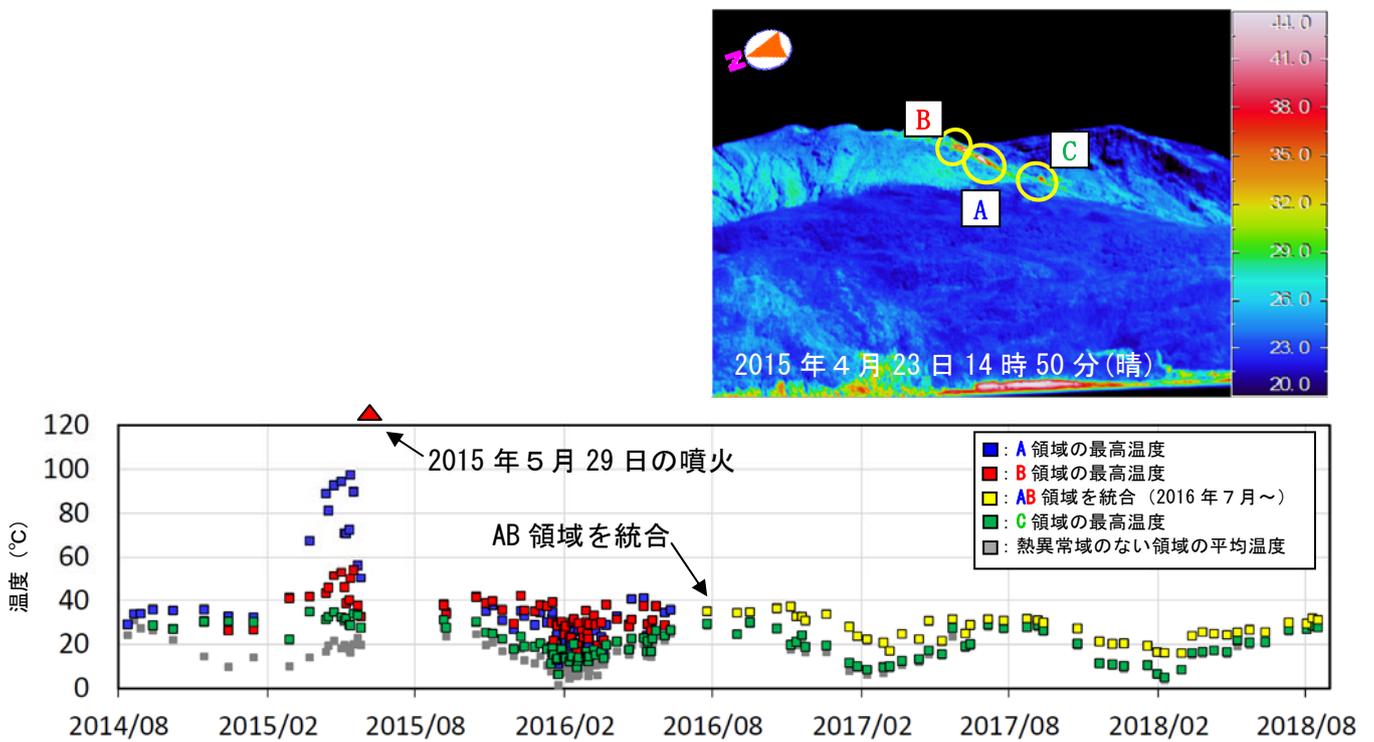


図3-2 口永良部島 新岳西斜面の熱異常域の温度時系列（2014年8月～2018年8月16日）

赤外熱映像装置による観測では、新岳火口西側割れ目付近には依然として高温の熱異常域が存在するものの、温度は2017年頃から低下しています。

2016年7月よりA領域とB領域を統合しています。

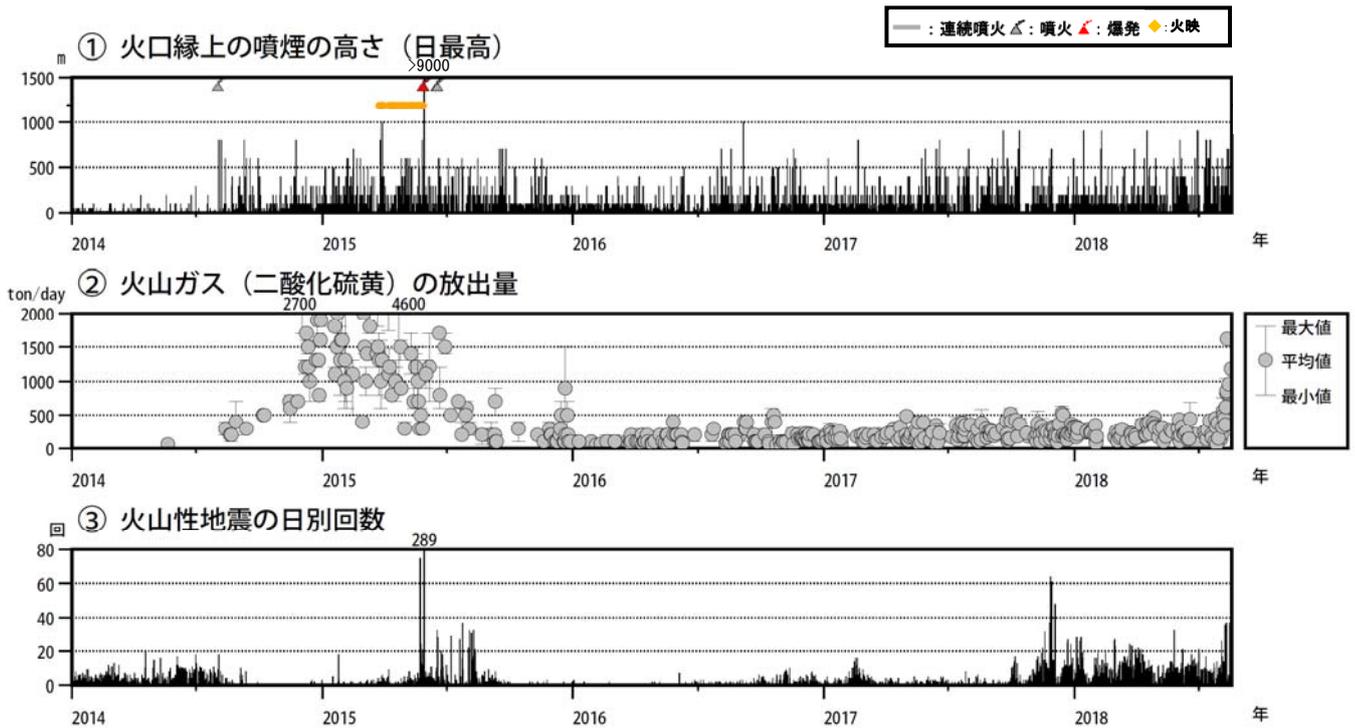


図4 口永良部島 火山活動経過図 (2014年1月～2018年8月17日)

- ・新岳火口では、2015年6月19日のごく小規模な噴火以降、噴火は発生していません。
- ・17日に東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス (二酸化硫黄) の放出量は、1日あたり1,200トンと、引き続き多い状態で経過しています。
- ・火山性地震は2017年11月以降、概ね多い状態が続いています。

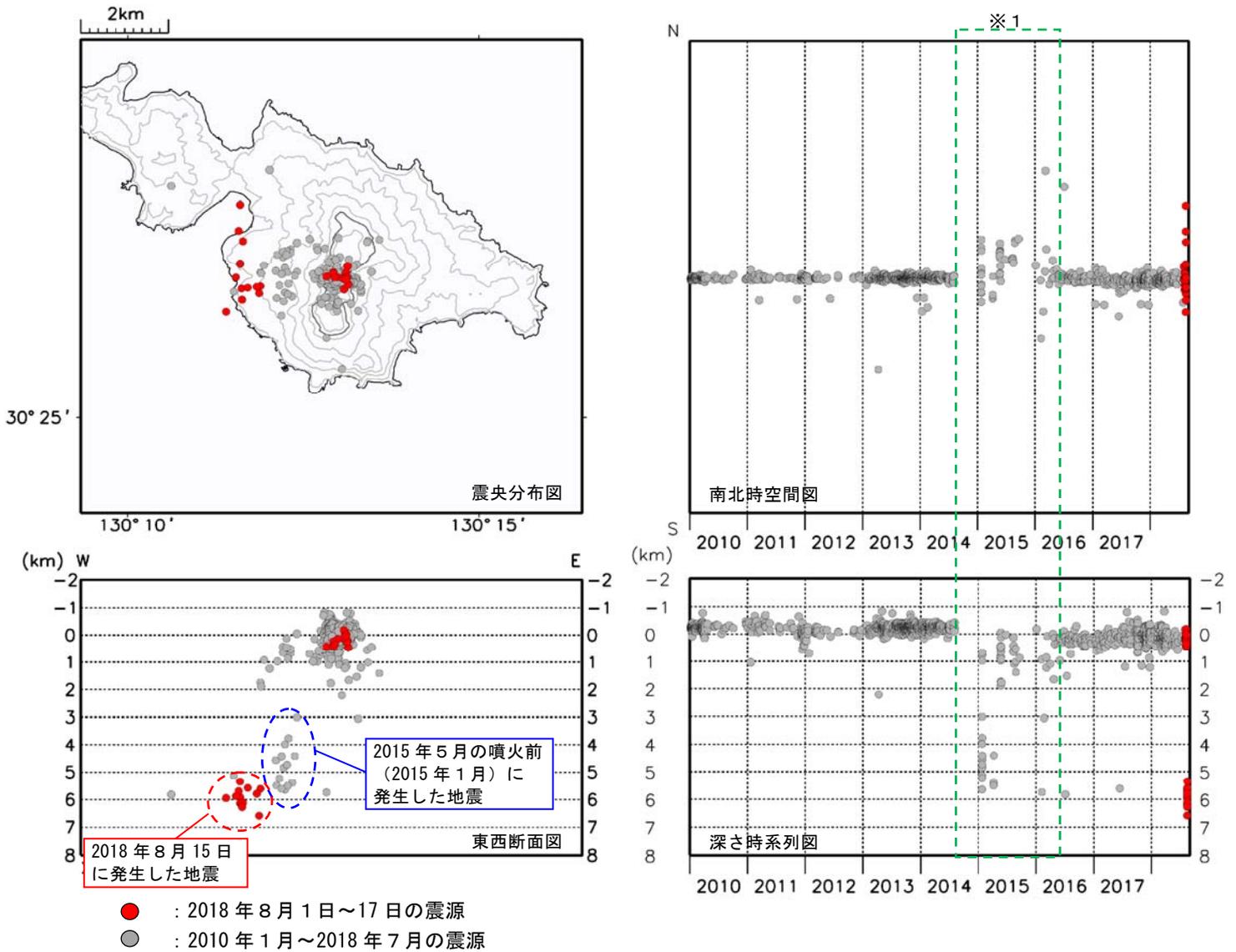


図 5 口永良部島 震源分布図 (2010 年 1 月～2018 年 8 月 17 日)

- ・ 15 日には、新岳西側山麓のやや深い場所を震源<sup>※2</sup>とする火山性地震が増加しましたが、16 日以降は発生していません。
- ・ この火山性地震の震源 (赤破線) は 2015 年 5 月の噴火前 (2015 年 1 月) に発生した地震 (青破線) と概ね同じ場所であると推定されます。

※ 1 2014 年 8 月 3 日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から 2016 年 5 月 31 日まで (図中緑破線枠) は検知力や震源の精度が低下しています。

※ 2 精査の結果、2018 年 8 月 15 日の火山性地震は、新岳西側山麓の深さ 5～7 km 付近に分布しました。

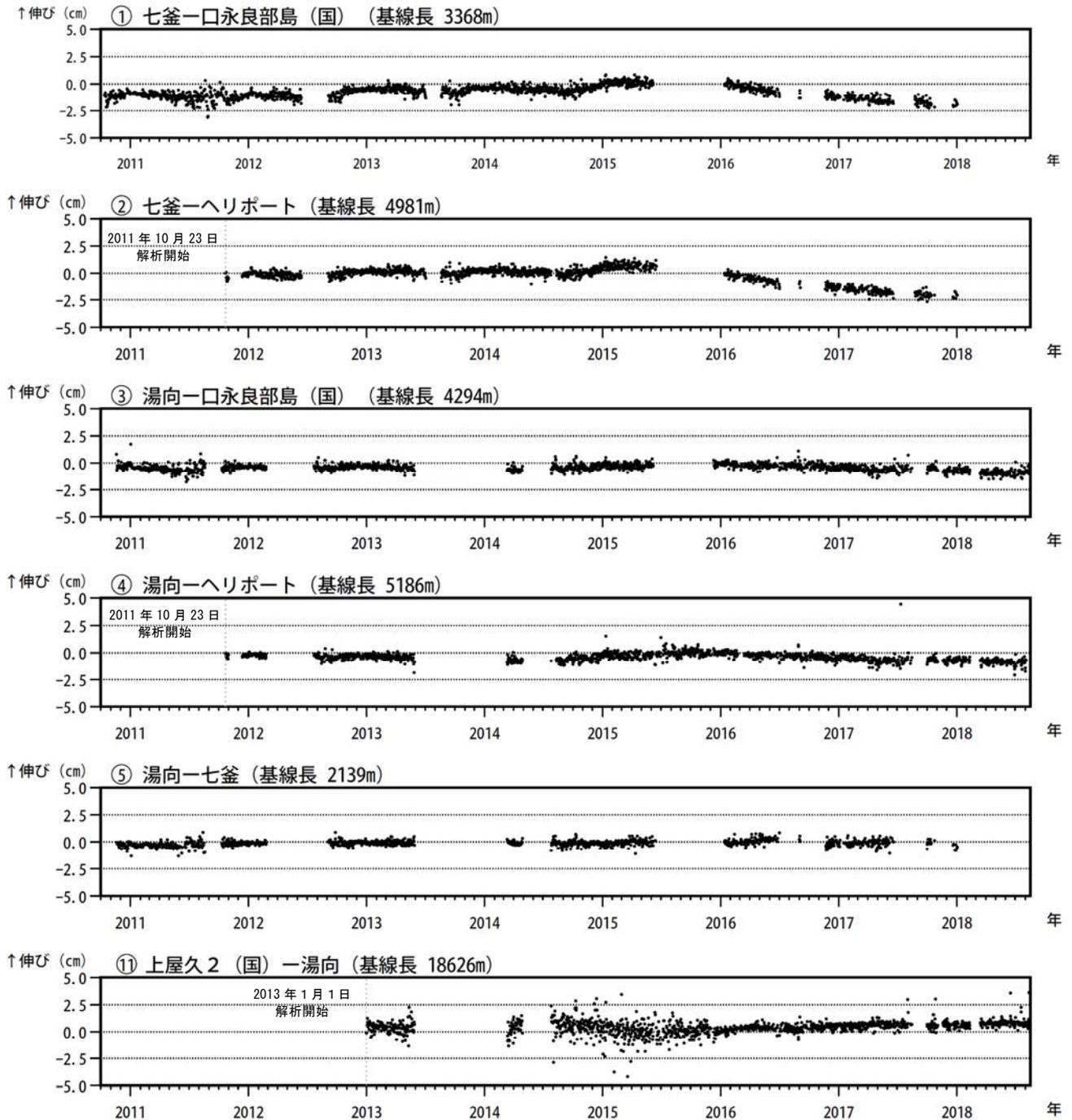


図 6 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化 (2010 年 10 月～2018 年 8 月 17 日)

口永良部島島内の基線で顕著な変化は認められていません。

これらの基線は図 7 の①～⑤、⑪に対応しています。

基線の空白部分は欠測を示しています。

2016 年 1 月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

(国)：国土地理院

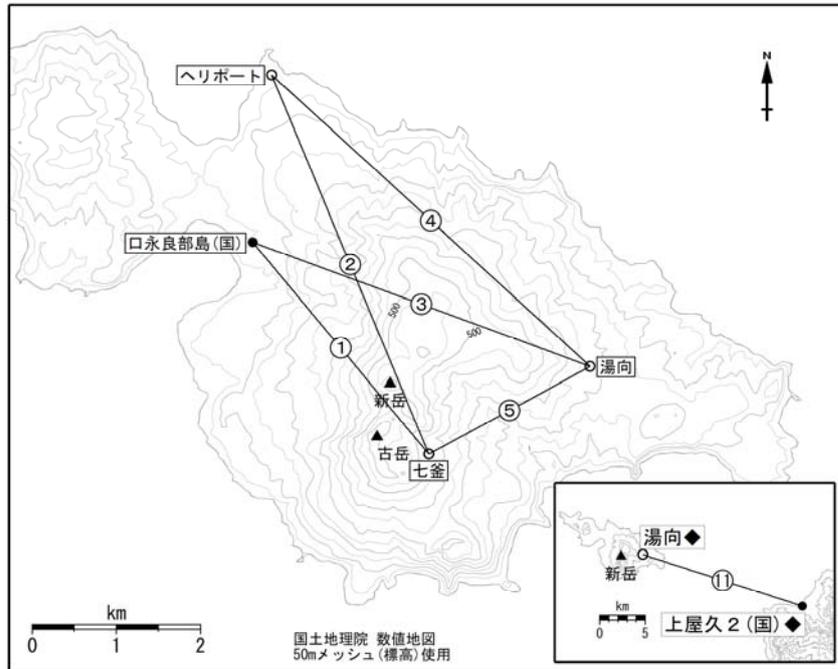


図7 口永良部島 GNSS連続観測点と基線番号

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
(国) : 国土地理院

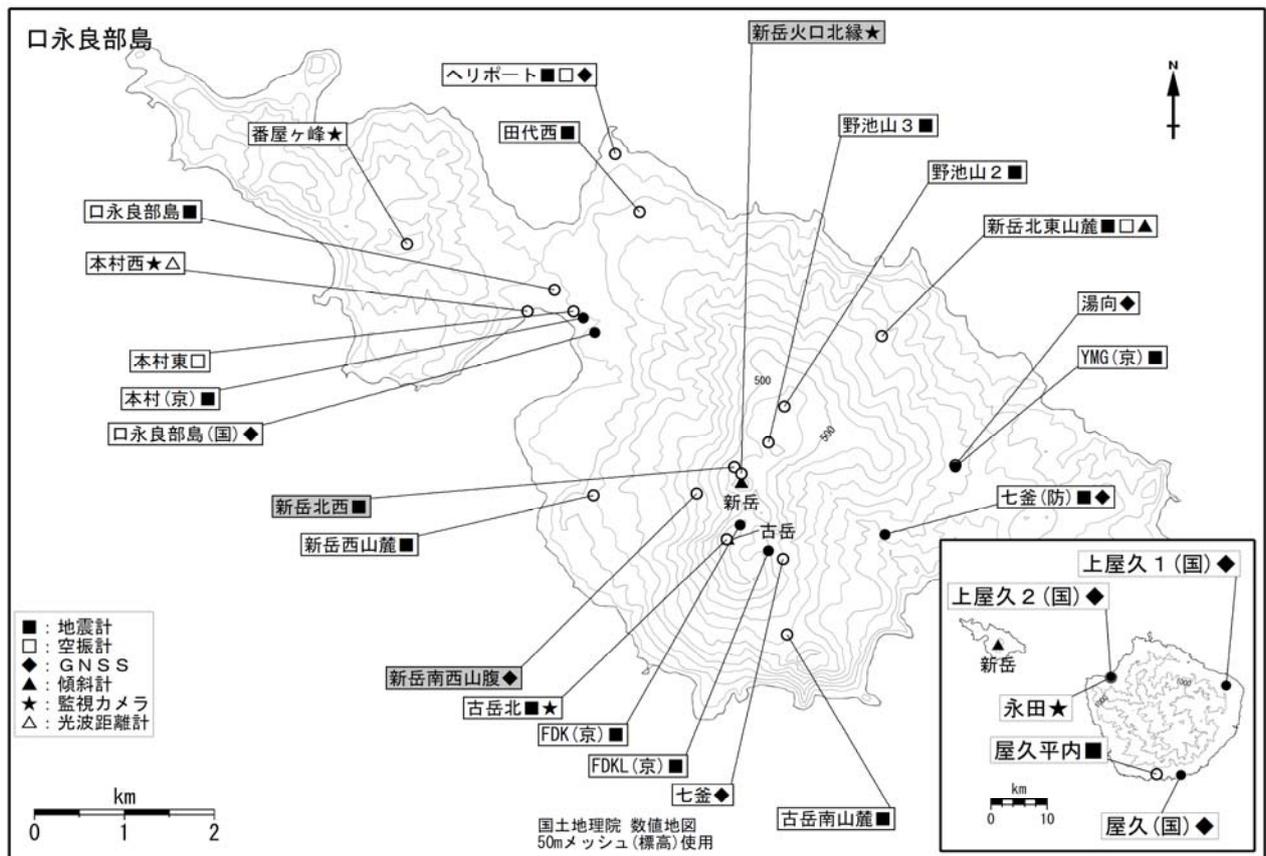


図8 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
(国) : 国土地理院、(京) : 京都大学、(防) : 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火により障害となった観測点を示しています。